

解
説

—— 番外地人物の時代と思想の背景を講開する

玉川信明

1 人物の選定と分類はこうだ

最初にこの編集を決定するに到った経過から簡単に申しあげると、企画者の方から出された当初の提案は「人間の解放と変革」のベースに則しての「奇人と奇想」であった。実のところ奇人と奇想はダイレクトに結びつかない感じもあつたが、それにしては私自身これまでも辻潤を初めかなり奇人的人物を扱ってきたので、早速企画要綱に依じて幕末から戦後にいたるまでの奇人を百名ばかり挙げてみた。

しかしなにぶん人数が多いことと、テーマに則してまとめるという点では整理が必要とされたので、まず江戸期をはずすことにした。ついで芸能人ふうの人物をはずし、また今日においてはすっかり著名になつた人物や社会的に偉くなつた人物もはずすようにしていった。そうすると——本首をいえば私の気に入るような人物だけ集めていったら——そこに残つた人物に一連の関連性が生まれてきた。

その一群の人物をとりまとめていえば、個々人においてはそれぞれ後年、人生上、文学上の実績をあげ、源初の分岐点は霧の彼方にみえないほどになつてしまつてはいるが、もとはといへば大正期の思想史・文学史上においても、あまり自覚されてない一群のリバータリアン（この言葉については後述する）中心となつた。

ここ数年來文化人類学の方面で人氣のある異人論、マーギナル・マン（境界人）、ノマド（遊牧民）であらう。

マーギナル・マンとは、通常の秩序、コスモスの周縁の部分にある人間の意であり、狂人、精神病者、身体障害者、非行少年、犯罪者、変人、病人、アウトサイダー等々を指す。彼らはいずれも内部人間であることができず、いわば内部と外部とを行き交いする種類の人である。周縁部をさらに離れていけば、内的秩序とほとんどかわりを持たない、自分の属する少数者集団、もしくは自己のみの判断によつてさすらうノマドとなる。マーギナルの奇人たちは、中心すなわち権力からより遠いことによつて、苦悶の日々もあるが、無支配の非権力的で自由な人間群たらざるをえない。しかしこれらの人々はノマドと接触する部分はあるにしろ、ノマドとはいえないだろう。彼らは現実逃避の志があつても、むしろ逃避できず（富士正晴のように、外見的には隠者の様相をとつていても）現実に勇敢にコミットする一個の生活者なのである。

それではこれらの人々がいつたどのようなようにして生まれてくるかであるが、これは実に難しい問題である。世に「天才学」なる分野があるが、「奇人学」となると、学会でもまったく問題にされていないようである。

私には当人の出自、生い立ちに多くの関係があると思える。DNAの血脈までさかのほれば、家系にももの狂おしい系譜を持

かつて私には添田啞蟬坊、貌与太平、武林無想庵、大泉黒石、宮嶋資夫、逸見直造、山岸巳代蔵、梅原北明、岡本良一、松尾邦之助らを扱つた『日本ルネッサンスの群像』なる書があるが、私自身のこれまでの足跡と氣質上において、こうした人物を核に拡大していけばよからうと判断したのである。

とすると、これは奇人であるにしても、むしろ「ケタはずれの人物」という意味あいの人々ということになり、メイン・タイトルは「日本番外地の群像」、副題は「リバータリアンと解放幻想」ということになつた。それらの人物傾向と一般奇人との差はどんなものであるか、ちなみに（第4部オマケ）に載録されている「半世紀崎人伝」の人物列挙と比べられれば、かなり相違することに気づかれよう。

リバータリアンということであれば、これら人物群中その名に最もふさわしいのは、高田保、新居格、西村伊作あたりではなからうか。このうち新居格は自身近接思想としてアナキズムを論じていたこともあるが、自身はまったくの自由人である。

この三人くらいを核にして、左方に萩原恭次郎、菊岡久利、宮嶋資夫、生田春月、松尾邦之助らのアナキスト兼業者、右方には稲垣足穂、金子光晴、宮田文子らの自由人、上方には武者小路実篤、西田天香らの理想主義者、下方には辻潤、武林無想庵、深沢七郎ら虚無思想の流れがあつたとみることができよう。

——このような人物群に接して、ただちに思い浮かぶのは、

つ坂口安吾や文字通り旅行商人（カウボーイ）の家に生まれた林芙美子、放浪の演歌師の息子添田知道（カウボーイ）があり、精薄児の山下清や芸妓の家庭に生まれた高橋鐵などそれぞれに出自の驛を宿していよう。

出自はともかく、彼らを眺めていて比較的見やすいというか、自然とみえてくるのは分類別、タイプ別の枠組である。ただし類別化といつてもさまざまタイプ化が考えられるが、一見してわかるように、ここには詩人、作家が多い。総数五十人余りのうち、過半数が文士および詩人である。文士をさらに拡大して文筆業ということであれば、山崎今朝彌や宮田文子のような実践者を含めて、ほぼ全員が文筆家であるともいえる。

逆にいえば、文筆とは本来的に物狂おしい精神を秘める所業なのであろう。まして文学とは、本来的に秩序にあつて秩序の周縁部にしか生息しえない種類のジャンルである。

しかもそれら文筆家にあつても、さまざまなパターン、系譜が見えてくる。

フランス文化系の人々が結構いる。西村伊作、松尾邦之助、宮田文子、武林無想庵、平野威馬雄といつた人々である。いうまでもなくフランスは個人主義の国柄、日本のようなジメツとした湿度の高い、単一共同体的世界においてはこのような人々はどうしたつて異人、異邦人的存在たらざるをえない。

つぎは芸術系——これは芸術家であることによつてフランス系とも重なるが、稲垣足穂、金子光晴、伊藤晴雨、竹久夢二等

美神に魅せられた人々がいる。彼らは美において純粹化されることで、大衆的人気に関係なくおのれ自身は、秩序外の孤獨な存在たらざるをえなかった。

芸術家たらざるも、すべて純粹精神においては異人たらざるをえないのであって、あらゆるジャンルにおける純粹人が秩序からはずれていくことになる。宗教人も同じ運命にある。だが徹底した宗教人は、すでに秩序とかかわりあいのないノマドであるとすれば、ここにある人物はやはりマージナルな存在であり、辻潤、小野庵保蔵、西田天香、中西悟堂といった人々がそれに相当しよう。

さてこれらの人々の生活ぶりをみるに、無頼な存在が多いことである。彼らの多くが大杯を傾け、異性にとられ、時に修羅乱闘の場面まで引き起こす。それというのも所詮は自己の解放への足掻きによるものであるが、奇人は一般的なイメージとして、なによりも生活という外見において奇人となる。

ただし生活外見といつても、紳士型というか、むしろより徹底した秩序志向型の人間として奇人である場合がある。その典型は、内田百閒みたいな人で、彼は自己流の秩序を構築しつつけることで奇人であった。これを求心的なフラン・ヴィタール型奇人とすれば、本巻に登場する人物は反対の反秩序を積極的表現する導心的なエラン・ヴィタール(求心)型奇人が多く、いわば「人の血の氣の毒」によって奇人変人となっている。

本書に登場する人物の半数が、その青春期に大正(一九一二〜二六)を得ていることが証明されている。その意味では、いわゆる大正期というものをなめてはいけないのである。

大正といえは、これまでだとさまざま吉野作造のデモクラシーに、志賀直哉、武者小路実篤らの「白樺派」と相場がきまっています、なんとなく明治と昭和にはさまれた、ふやけた時代というイメージがあった。しかしそれとても後に触れるように実は大変なイメージ違いなのであるが、大正を社会的な方面から考察すると、年表からも推察できるように、実は大変な動乱の季節であった。

僅々十四年間に、第一次世界大戦(大二三)、ロシア革命(大六)、米騒動(大七)、関東大震災(大十二)という世界的、日本的規模の大事業を四度も迎えている。それらの事件の大きさからしても、鋭敏な知識人への影響の度合いが推し計られようというものである。

それをもう少し具体的な精神的経緯としていうと、大正の直前と幕開きには、平塚らいてう、伊藤野枝らの『青鞜』(明四十四)、大杉栄・荒畑寒村らの『近代思想』(大一一)の発行があった。そしてその終幕には、辻潤らの『虚無思想研究』(大十四)、吉行エイスケの『虚無思想』(大十五)発行がある。この両端をつないでみると、大正という年月の上になぎれもなく黒々とした一本の線が浮かび上がってくることになる。

いわゆる奇人ぶりというものは、本来後者型のものであろう。したがってここにあげられた番外地奇人の多くが躍動的なエラン・ヴィタール型であるが、実は、それは必然的にそうなったという面があるにしろ、私とすれば、むしろそのような人物を意識的に選択しているところに、リバータリアンのリバータリアンたる意味あいをもたせているつもりである。

2 奇人輩出の社会的条件は何か

ところでどうやら奇人という存在には、奇人輩出のための、なにがしかの社会的条件というものがあろうなのである。

さしづめ社会主義社会には、奇人が出そうにもない。現代資本主義社会にも、奇人はいないのでは? ……つまり奇人の出やすい時期、出にくい時期というものがあろうである。その意味では私が選んだこの種の人物は、一言でいえば、黒々とした情熱を抱く大正期ロマン派の一統ということになり、大正期は奇人の一大産出期であった――。

ただここに明らかにしておかねばならぬことは、大正人物というのは、大正生まれという意味ではない。大正の思潮に衝撃を受けた人々という意味である。

本書に収めた『番外地人物関係年表』にも示されているごとく、人間のもつとも思想的な刺激を受けやすい年齢を二十歳から二十五歳とみて、ここではかりに二十三歳平均としておくと、

この黒線上に、大正の放埒無頼ともいうべき数々のエネルギーが往来した。

詩史上に著名な、高橋新吉・萩原恭次郎・岡本潤・秋山清・小野十三郎らの『赤と黒』『D.A.M.D.A.M』『弾道』などにおける苦悶と叫喚が生まれたのもこの線上だし、中浜哲・古田次郎・和田久太郎・木村源次郎らの反逆と復讐の大正テロリズムを生み出したのも同じ線上にあった。

ことに死者九万人、全焼家屋四十五万戸の関東大震災の影響は大きく、知識人に大きなショックを与えた。谷崎潤一郎などはかえって「これで東京はよくなるぞ」と快哉を叫び、菊池寛は「自分は一念発起して武者小路のごとく百姓をしたい」と真剣に考えていた。

とりわけ衝撃を受けたのは、アナキストおよびアナ系の文学者で、彼らは大杉栄の死とともに自暴自棄に陥り、文字通りアナキステイックな喧騒と反抗の叫喚をあげざるをえなかった。

その溜り場の一つになっていたのが、小石川白山上にあった書店南天堂である。ここへ辻潤や宮嶋資夫、萩原恭次郎、壺井繁治、小野十三郎らがしげしげと通い、議論を沸騰させ、踊ったり歌ったり、たまに誰か異分子が紛れ込んだりするときには乱闘騒ぎとなった。有名にならない前の林芙美子なんかも時々現れてテーブルの上にひっくり返り、「さあ、どうともしておくれ!」とやけっぱちになつて啖呵をきっていた。

これら一切の状況が、番外地人物の番外地的生活といわずして何であらう。

簡明にいうならば、大正はいわば明治の反動期である。明治の「全体」に対する「個我」の時代であった。ただし「個我」といっても、今日的なひよわで矮小なものではなく、それは爆発にも等しい、初源的な個我として粗野な活力を蓄えていた。その頃の社会主義雑誌「新社会」で、山川菊栄が「近頃の文芸かぶれの青年を左の五種に大別する」としている。

第一種は、ベルグソン生かじりの創造屋。第二種は「俺は」「俺の」「俺に」と年中俺づくしの独り言をいって、感激耽溺している自己崇拜家。第三種は、安価な人道主義の水同様の手製の酒に陶然としているセンチメンタルなトルストイアン。第四種は、働き盛りの身でいながら、年寄りの声色を使って世の中に愛想を尽かしたようなことをいうノラクラ者の幻滅屋。第五種は、個人と社会とを別々に考えて個人主義の看板を掲げ、怪しげな草の庵に昼寝している世捨て人の若隠居——。

山川菊栄は新時代の展望者気取りで、それらの層を否定的に観じているが、その後の事實はむしろ山川の意に反して、今日省みらるべきはむしろ彼女の指摘する五種類の人間といえる。彼らの名はリバータリアン、日本の真のルネッサンスはこの期にあったといつて過言でないはずである。

馬鹿」と呼ばれた岩野泡鳴もまたこのアンソロジーに入れて決しておかしくはないのであるが、なぜこのような人選になったか、より具体的に納得していただくためには、付録の「リバータリアン系主要雑誌目次」をご覧になっていただければ一目瞭然である。

大正期には、これら以外にも数多くの雑誌があった。このような雑誌の簇生自体において、人間解放の時代の様相を示しているが、ここに掲げた雑誌群にあつては、その各々の雑誌の執筆人が互いに交錯しており、そこに同じアトモスフェアに棲息している模様がみえてくる。いわゆる人脈というものが明瞭に浮かび上がっていて、各々がどこかで、赤い糸によつてつながりあつている親戚的存在であることがわかる。

それら社会運動専門職としてのアナキストではない、自由と抵抗の番外地人物——すなわち「リバータリアン」たちを一纏めに研究する価値は充分にあるのだ。

3 自由解放と社会的な効用をみる

こうした精神を知つて、おそらく読者がただちに思い浮かべられるのは、これまでのダダリスト、ニヒリスト、無頼派、新戯作派、アウトサイダー、最近ではノマドといった精神状況の一群ではないだろうか。山川菊栄の言にもあるように、実際のにもダダやニヒリズムは大正期の産物であつた。

らないのであるが、考えてみれば大正期自体が境界の扉的存在である。大正期総体において、明治の出口であり、昭和の入口であつたという見方もできる。しかしこの期の最も特徴的な思潮に、大杉栄らのアナキズムがあつた。アナキズムこそ大正期に奇人を簇生させた主要な原因であることが、今日忘れ去られているか、もしくは故意に伏されている気がする。

アナキズムの定義となると、これはアナキスト自身にも容易に答ええないであろうが、対比していえば、マルクス主義の客観主義、理論主義発想であるのに対し、むしろ主観主義、現実主義的な立場に立つ。人間の奥深い解放をもつて生命とする思想である。その意味では主義というよりは傾向ともいえる存在であつて、かつて文芸評論家の白井吉見は「文学と一番なじみやすい思想はアナキズムである」という言い方をしたことがあるが、まさしくそのような位置にある。

抑圧された内面の解放の思想という意味では、より本能に近い存在であり、本能の爆発という点では誰しも既成の秩序を超える奇人たらざるをえないだろう。ここに選ばれた人々はその大半がなんらかの意味でアナキズムと接しているか、さもなければ同じ血の匂いを感じさせる人々である。こんな人物がなぜここに……と思えるような人名もあるが、わかっていただけはずである。

そういえば「神秘的半獣主義」を唱えて、大杉に「偉大なる

しかし私はリバータリアニズムはそれらをみな含んでいて（総称をなして）、なおかつ別種のもののように思える。

余談であるが、私は最初副題としては、現在のタイトルを含めて三つ考えた。一つは「大正ノマドと解放幻想」であり、他は「アフランシと解放幻想」である。

しかし検討していくうちに、先にも述べたようにノマド論流行ではあれ、彼らは単なる放浪孤独のノマドではありえないことにすぐ気がついた。私の基本的な趣旨からいえば、リバータリアンとはどこかで社会的、建設的な存在なのである。

趣旨からいえば奴隷状態からの解放を意味する「アフランシ」が最も適当であるが、アフランシは日本ではまったくいっていいほど知られていない無名の言葉でしかない。

アフランシに対しリバータリアンも、ほぼ同様の位置にあるが、言葉（ネーミング）としてはすでに世界的に市民権を得ているのでこちらの方をとることにした。（それに友人に相談したところ、即座に「オバタリアンみたいでいいんじゃないの」といつてくれたので「よしっ」となった。）

ところでこの「リバータリアン」なる人物の前身であるが、戦後の日本文学では、無頼派にルビをふつて、「リベルタン」としている。ここでいうリバータリアンもむしろリベルタンと同じ語義をもつ単なる「自由人」の意味合いである。しかし字引を引いていただければわかるが、リバータリアンは「アナキス

ト」と出てくるはずである。そこが異なる。しかし辞書の上ではアナキズムとあっても、実際にはまた異なり、リバータリアンの半分しか意味していない。

なぜならこのリバータリアン(リバータリアニズム)ということばには、一定の歴史的な経過があつて、まず最初のいいだしつべは有名なアナキズム啓蒙紙『レピスタ・ブランカ』の創刊者であるセバスチャン・フォールとされている。

フォールは当時アナキズムの宣伝が禁じられていたので、カモフラージュのために用いたとか、テロ行為を主体とするアナキズムのあまりにも悪しきイメージを避けるために本来の意味あいをもつ新語をつくつたなどといわれている。

その意味ではリバータリアンは確かにアナキズムの別語かもしれないが、その後リバータリアニズムの語は相対的に独立していった。従来のアナキズムより、またアナルコ・サンジカリズムより、より広範なニュアンスをもち、実践的というよりはむしろ、知的な意味内容をもつ内容に変化してきた。

具体的にリバータリアンとされる人物名をあげるとすれば、イギリスの詩人で美術評論家のハーバート・リード、フランスの文学者で実存主義者として知られているアルベル・カミュ、同じくフランスの女流哲学者シモーヌ・ヴェエユ、ユダヤ系のドイツ人哲学者マルチン・ブーバー、現代ではアメリカのポーター・アン・ド・マッシュを指す。

したがってリバータリアンはアナキストの側からすれば、あるいはアナキストではないかもしれないが、仲間うちのシンパ存在であり、時に行動派、社会派アナキズムに対し、思想派、個人派アナキズムとして捉えられたりもする。

このような人々であればこそ当然のこと、最初から社会的効用をもたざるをえない。彼らは一様に社会の通俗的秩序の反抗者であり、何よりもそうした通俗的秩序を強制する権力にソツポを向き、反逆を続ける。

さきに動かしえない位置としての出自の問題を取り上げたが、出自という点で、ことに注目したいのは、ここに二人の混血児作家が入っていることである。ロシア人との混血児である大泉黒石、フランス人との混血児である平野威馬雄は、一部の共同体というよりは日本人に対する周縁人、アウトサイダーたらざるをえない存在としてある。

しかしリバータリアンの反逆性においてはどこかに余裕があり、むしろミステイフィケーションというか、ユーモアさえ感じさせる面がある。大杉栄には『悪戯』という小さな本があるが、文字通り彼にはどこか芝居っ気があり、おふざけの世界があつた。芝居っ気があり、おふざけがあることで、より大衆との接点を濃くしていた。

その辺は生真面目一辺倒のマルキストとは少々異なる。本書では梅原北明の抵抗のありようなどその典型的なものであろう。

これらの人々に共通する点は、いずれもアナルコ・サンジカリズムなり、スペイン市民戦争なりに関心をいだき、スターリン独裁政治に反抗した人々であるが、それは一言でいえば「自由」の名においてなされたといつてよいであろう。あらゆる現実の検証が「自由」の一点においてなされるわけで、それを私はこの書でさらに拡大解釈してとっているわけである。

それゆえにリバータリアンの自由の概念は、マルクス主義者のそれとは様相を異にする。有名なイギリスのハーバート・リードは、つぎのような豊かな自由の概念を語っている。

「自由とは必然についての知識であるとマルクス主義派はいつている……。この定義にともなう唯一の不都合はそれがあまりに偏狭すぎるという点である。その殻をくちばしでやぶるヒヨコは、自然の必然について知識などもっていない。ただみずからに自由を保証するようなやり方でふるまう自発的な本能があるだけである……。われわれは自発的な発展を許さなくてはならない……。またエンゲルスとマルクスがフリーダムとリパティを根本的に混同していることも注目されるべきである。彼らがフリーダムによつて意味しているものは、政治的自由^{リベラティ}、つまり経済環境への人間の関係にすぎない。しかしフリーダムとは生の全過程への人間の関係なのである」

つまり自由の基礎はむしろ無自覚的な自然の生活、いわば子供の遊戯のような状況に置かれているのだ。

彼は『グロテスク』を発行する際に、「世の中を茶化してやろうと思つた」という表現で創刊の理由を述べている。茶化す——それは右であれ左であれ、要するに硬化した世界に対する何よりもの溶解剤であつた。そのような余裕とユーモアの精神において、戦争に対してもうまく(ずるく?)立ち回っている。

辻潤となると一層徹底していて、晩年は尺八を吹いて門付けして歩いた。時々酔っぱらつては、街頭でなにやらわけのわからぬ喚び声をあげていたが、戦争に突入するや周囲の耳にも明瞭に聞き取れる声で叫んだ。「センサー、ハンターイ」。

リバータリアンの生においては、より自己に密着しているがゆえに、あるいは今ふうない方をすれば、パーソナリティに基づいているがゆえに原則的には転向というものがありえない。それ自身でしかないことによつて、転向は意味がないのである。かりにその人が一時的に他に席を移動しても、再び回帰することになり、回帰した場所がつまりリバータリアニズムということになるのである。

ステイルナーの『唯一者とその所有』によれば、権力政府において最も恐れるのは、対立する相手の党派や思想家の一群ではない、個である——というが、人類は個において反権力の平等存在となる。個が歓迎されないかぎり、平等はありえない。個において自由と解放が初めて誕生する。個——つまりあらゆる価値観念、思想から解放された裸形の人物(アフランシ)が

リバータリアニズムの核心にある。

4 人間交流の共生体が必要だ

ところでアナキズムを別の言葉でいい換えれば、現実の「よき生活」の追認的な理論ということになる。

ここで現代的な生活スタイルの問題が浮かび上がってくるわけであるが、総じてライフ・スタイルの変更こそ、未来を暗示してやまないのではないか。私など、大量虐殺としての革命でもなく、体制のより強化としての改良でもなく、自己と相手との関係変更、つまりはライフ・スタイルの変更こそ現代アナキズムの要諦のように思えるのだが、それはそれでよしとして、繰り返せばリバータリアンは現実の生活様式に満足できない一個の生活者であることによって、ライフ・スタイルの変更者であるとみることが出来る。

それゆえに振り幅が大きく、そこには無数のアナキーでバラエティある表現がともなう。サトウハチローや中西悟堂はよく裸になっているが、ヌーディズムもまたリバータリアンのものである。菊岡久利の文章によつてみても、彼らの仲間には京都の千本組のようなやくざ組織から、浅草のカジノ・フォーリーのような芸能界まで含んでいる。

そのライフ・スタイルの中心的存在に共生体志向がある。リバータリアンは、よりアナキズムに近ければ近いほど、そ

のいうように、富を否定するのがいい。これは現在においては驚くべき発言かもしれないが、大正期においては真剣に考えられ実践されていたことなのである。

現に有島武郎は、北海道の刈太の農地を小作民に無償で与えてしまった。(有島は渡欧した際、当時ロンドンに在住していたクロポトキンと会っている。)

そもそも財産とは、ブルードンのいうように、他人の労働の収奪であるとするれば、財産のあることに後ろめたさを感じざるをえないだろう。ましてみずからの力で得たのではない、親の財産の相続とあれば、真実に敏感な文学者にとっては、良心の呵責に耐えざるところである。岡本潤などは、一万円(もちろん当時の、ではあるが)ほどの親の財産を受けついでことで、なんととはなしの罪の意識を持ち、早く使つてしまおうという衝動にかられていたと語っている。

その結果、一灯園や山岸会のような従来の家庭の単位を超えての多人数で協力しあう、親和と創造の新しい生活体が生まれるのであるが、ここでまた問題が起きてくる。

辻潤は「俺たちだけならなあ……」とつぶやいていたそうであるが、まったくそのとおりであつて、他人を抑圧することを知らないリバータリアンが集まれば、それがすなわち無支配の自治共生体となるはずのものである。

そのような共生体にあつては、自己は解放されているがゆえ

うした理想社会志向をもつていた。当時はクロポトキンの「相互扶助説」が流行つており、誰しもの程度かに共生体イメージに出し、他はなくて平然としていた。それが理想性と重なっているように錯覚できた時代である。あのように数多く雑誌が出た背景にも、一種の共生体志向をみる事が可能である。

それでは個人主義者としてのリバータリアンがなぜ共生体志向を持つのか、ということであれば、それは簡単明瞭なことであつて、個なるがゆえに全を求めるとしかいいようがない。個において人間の心からの交流を求めていた。埴谷雄高のいうようなセックスの世界も、個が溶解されて全に近づく過程である。個の溶解において通俗の固定世界から遠ざかり、居候、置候おきようの存在も可能となる。

このような共生体志向は、いわゆる共産体志向とは異なる。いわゆる共産体にあつては物質的な臭いが濃いものであるのに対し、共生体は本能的には精神共生体の意である。個人と個人の心の通いあうところ、共生体が生まれる。それは必ずしも物質的条件を必要としない。

しかし権力は逆である。権力は必ず暴力を伴い、暴力は物質の富を背景とする。権力は個人の抑圧を前提にするものである以上、富を問題とせざるをえない。富が権力や争いを生むとするならば、いっそ山岸巳代蔵(山岸会)や西田天香(一灯園)

にもはや奇人ではありえない。創造的少数者は永遠に必要存在として残るとしても、これまでの奇人の番外地は番内地となる。もはや奇人は必要がない。しかしここにも問題が生じるのは、そのようにして出来上がった共生体が容易に封建的な小さな国家に變じて、個を抑圧することである。

ここにおいて、再び人間の解放の問題が登場せざるをえない。山岸はそれを思想や修行だけに頼るのではなく、人種の改良によることを思ひつた。その文章を本巻に掲載する予定であつたのだが、山岸会の方で拒否されたので、ここで簡単に解説しておく。山岸は鶏の優秀な品種改良家であつたことから、同じ姿勢をもつて人間の品種改良を思い立ち、これによって急速に理想の人類社会が達成できるとした。

「私は遺伝繁殖学的、および人為的・自然環境変異理論を基礎とした、計画的・積極的・人種改良を、急速にかつ現状に即して、理論と実際を結びつけた方法にて、実施せんとするものである」(「ヤマギシズム社会の実態」)

その結果百万人のエジソンを、千万人のシャカ、キリスト、

カント、マルクスにまさる人々を生み出せるとしている。

そうなる改良の実践そのことにおいて、大前提とならねばならないのは個人倫理(即社会



山岸巳代蔵

倫理)といふことになるのであるが、山岸はそんな生ぬるいものじゃとても駄目なので、無我執、世界の必要を説いている。

——番外地人物の時代と思想的背景はだいたい以上のようなことであるが、このような人物を他に挙げるとするならばまだまだいくらかもある。

例えば歌人の安成二郎は大正五年に「文学村の三奇人」という小文を書いているが、そこには安成貞雄、坂本紅蓮洞、中村孤月の三人を挙げている。坂本は本書にも見えるが、他の安成貞雄はみずから「与太大王」と称し、名刺に「翻訳鑑定所長、高等暫間」なる二つの肩書を刷っていた。中村孤月は、く新しい女」の箱屋、「青鞥グループの用心棒」といった意」として名前を売った。

付録の「主要雑誌目次」に挙げてある人物をみな拾うとあれば、主な者だけでもこの二倍も三倍もに膨れあがるはずである。しかし単に紙幅の面だけではなく、現存している資料の乏しさからも、それは不可能なことである。第一私はこのアンソロジーを組むについて、容易に手に入る単行本を扱うまいと決意した(しかも直接関係者のみの証言蒐集である)。ところがそうなる、本の方にいいものがあるのに、そこから抄出することができず、大いに悩まされたことである。

その意味では、リバータリアンの職人かをはずさざるをえな

かった。例えば作家加藤一夫、詩人岡本潤、諷刺画家・エッセイストの辻まことなどがそうである。彼らについては、雑誌掲載のための適当な文章を見つけてあげることができなかった。

ただ岡本潤といえば、彼の著書に「ひんまがった自叙伝」の副題をもつ「罰当たりは生きていく」(未来社)がある。この書は現在にあつて、大正期のアナ系文士の動きを知るには、最適な本となつてゐる。これら一群の人物の思想と流れを知りたい方は、ぜひご一読願いたいものである。

これらのうちには、今日からみればマイナークラスの文士にすぎない者がいるだろう。しかしそこがむしろリバータリアンのリバータリアンたるゆえんでもあり、マイナーであるところにこの種人物の詩と真実があつた。たとえ文芸史上に名前のみえなくとも、その歴史上の閃光は永久に消えないはずである。

*限られた紙面にできるだけ多くの資料を読者に提供する都合上、本書に収録された各文献は編者の判断により大幅な削除がなされ、その「核」と思われる部分のみが採られています。ご了承ください。

なお、脚注部の「略歴」は以下の書物を参照しました。「日本近代文学大事典」講談社、「現代日本人物事典」旺文社、「現代人物事典」朝日新聞社、「現代人名情報事典」平凡社

参考ブックガイド (「」は単行本名もしくは単行本収録文タイトル、「」は雑誌掲載文タイトル、行末数字は西暦)

稲垣足穂

- 「作家論」 伊藤整 筑摩書房 61
- 「イナガキさんとニシガキさん」 伊藤整 文芸 七ノ二 60
- 「異端者の系譜」 塚本邦雄 思想の科学 64・4
- 金子光晴
 - 「萩原胡太郎と金子光晴」 堀田善衛 岩波講座 文学の創造と鑑賞 一 岩波書店 54
 - 「金子光晴 現代作家の心理診断と新しい作家論」 大岡信等 国文学解釈と鑑賞 二六ノ二四 61
 - 「金子光晴という詩人」 田村隆一 本の手帖 三ノ四 63
 - 「金子光晴論 現代詩人論」 壺井繁治 国文学解釈と鑑賞 二五ノ一 50
 - 「一つの系譜 その一点」 伊藤信吉 本の手帖 三ノ四 63
 - 「文明の人」 中野重治 本の手帖 三ノ四 63
 - 「保守の人・金子光晴」 秋山清 本の手帖 三ノ四 63
 - 「ミミズクの眼 金子光晴の虚無」 開高健 本の手帖 二ノ五 62
- 田中英光
 - 「大男の小心 田中英光の苦闘」 戸石泰一 文学界 九ノ九 55
 - 「善良な罪人 田中英光のために」 山本健吉 人間 五ノ四 50
 - 「太宰治と田中英光」 野平健一 新潮 四ノ三 49
 - 「田中英光」 石堂淑朗 本の手帖 五ノ二 65
 - 「田中英光を悼む」 青山光二 近代文学 五ノ二 50
 - 「田中英光君のこと」 八木義徳 文学行動 四ノ一 50
 - 「末弟田中英光」 岩崎英恭 新潮 四ノ二 50

坂口安吾

- 「安吾のある風景」 石川淳 文学界 二ノ六 56
- 「織田作之助と坂口安吾」 中島健蔵 新潮 四ノ二 47
- 「現代作家論 坂口安吾」 佐々木基一 群像 六ノ二 51
- 「坂口安吾と大岡昇平」 中島健蔵 東北文学 三ノ二 48
- 「坂口安吾の生活と意見」 安岡章太郎 文学界 八ノ八 54
- 「坂口安吾への姿勢」 安田武 思想の科学 61・9
- 「事実と虚偽」 大井広介 群像 二ノ六 56
- 「青春坂口安吾」 田村泰次郎 小説新潮 九ノ七 55
- 「戦後作家論 坂口安吾」 寺田透 近代文学 六ノ五 51
- 「墮落論」その他」 河上徹太郎 文芸 二ノ五 55
- 「当世作家論 放浪者坂口安吾」 大岡昇平 文学界 五ノ一 51
- 「動物・植物・鉱物 坂口安吾論」 花田清輝 人間 四ノ一 49
- 今 東光
 - 「人と作品 現代文学講座 八」 木俣修等編 明治書院 61
 - 「現代の文学 七」 河出書房新社 64
 - 「現代の荒法師・今東光」 大宅壮一 文芸春秋 三ノ一 60
 - 「今東光における人間の研究」 今日出海 中央公論 七ノ二 61
- サトウハチロー
 - 「子供時代の夏休みの思い出」 サトウハチロー 児童心理 六ノ八 52
- 萩原恭次郎
 - 「アナキスト 岩佐作太郎・萩原恭次郎」 秋山清 転向 中平凡社 60
 - 「人と作品 現代文学講座 八」 木俣修等編 明治書院 61
- 「朝太郎と恭次郎」 横地尚 至上律 二 52

玉川信明 たまがわ・のぶあき

ノンフィクション・ライター

1930年生れ

富山県立中部高校卒

——主要著書

『日本ルネッサンスの群像』(白川書院, '77)

『真人山岸巳代蔵』(流動出版, '79)

『ダダイスト辻潤』(論創社, '84)

『田村栄太郎』(リプロポート, '87)

『エコーワールドパリの日本人野郎』(朝日新聞社, '89) 他

日本番外地の群像 リバータリアンと解放幻想

思想の海へ [解放と変革] ⑩ *第1回配本

1989年11月15日 初版第1刷発行

編著者——玉川信明

装 幀——平川 進

発行所——株式会社 社会評論社

東京都文京区本郷 2-3-10 ☎ 113

☎ 03-814-3861 Fax. 03-818-2808 振替・東京 7-89969

編集・制作——NRK出版部

東京都中野区東中野 1-41-5 新日本文学会館 ☎ 164

☎ 03-366-4650 Fax. 03-227-3657 振替・東京 8-52304

印刷・製本——日本製版株式会社

定価——2600円 (2524円+税76円) 0030-3119-3351

Printed in Japan

思想の海へ「解放と変革」全31巻 *白ヌキ数字は既刊

- ① 百姓の義 ムラを守る・ムラを超える 大野和興
- ② 方法の革命⇨感性の解放 バックス・トクガワ 徳川の平和の弁証法 いいだもも
- ③ 江戸期の開明思想 世界へ開く・近代を耕す 別所興一 杉浦明平
- ④ 民の理 世直しへの伏流 石渡博明
- ⑤ 倒幕の思想⇨草莽の維新 寺尾五郎 植手通有
- ⑥ 明治草創⇨啓蒙と反乱 植手通有
- ⑦ 自由自治元年の夢 自由党・困民党 井出孫六
- ⑧ 社会主義事始 「明治」における直訳と自生 山泉進
- ⑨ 大正デモクラシー 草の根と天皇制のはざま 今井清一
- ⑩ 近代文明批判 「国家」の批判から「社会」の批判へ 田中浩 和田守
- ⑪ アジアと近代日本 反侵略の思想と運動 伊東昭雄
- ⑫ 思想の最前線で 文学は予兆する 黒古一夫
- ⑬ 個の自覚 大衆の時代の始まりの中で 小田切秀雄
- ⑭ 芸術の革命と革命の芸術 栗原幸夫
- ⑮ 危機の時代と転向の意識 坂内仁 上条晴史

- ⑯ 反天皇制 「非国民」「大逆」「不逞」の思想 天野恵一 加納美紀代
- ⑰ 土民の思想 大衆の中のアナキズム 大沢正道
- ⑱ 水平⇨人の世に光あれ 沖浦和光
- ⑲ 日本番外地の群像 リバータリアンと解放幻想 玉川信明
- ⑳ 愛と性の自由 「家」からの解放 江刺昭子
- ㉑ 女性⇨反逆と革命と抵抗と 鈴木裕子
- ㉒ 自我の彼方へ 近代を超えるフェミニズム 加納美紀代
- ㉓ フェミニズム 繚乱 冬の時代への烽火 永畑道子 尾形明子
- ㉔ 谷中村から水俣・三里塚へ エコロジーの源流 宇井純
- ㉕ 島々は花綵 ヤポネシア弧は物語る 花崎皋平
- ㉖ 海外へユートピアを求めて 亡命と国外根拠地 田村紀雄
- ㉗ 歴史の思想 誰が歴史をつくるのか 斉藤孝
- ㉘ 無産政党と労農運動 伊藤晃
- ㉙ 天皇制国家の透視 日本資本主義論争I 青木孝平
- ㉚ 世界農業問題の構造化 日本資本主義論争II 河西勝
- ㉛ 戦時下の抵抗と自立 アソシエーション・リリス 創造的戦後への胎動 降旗節雄

刊行のことば

江戸期から昭和・戦後期まで三百年間、日本人自身が時代の最尖端において手作りしてきた〈生ける思想〉の集大成をおとどけます。

私たちは何者であったのか？ この世紀末に何者であるのか？ 二一世紀へ向けて、私たちは何者になろうとするのか？

ジャパン・アズ・ナンバーワンの極頂に立って、虚空へ向けてジャンプしなければならぬすべての日本人に、この「聖火」をリレーします。

未来へ向かって漕ぎ戻れ、この滾滾たる思想の水脈を！ 七色の虹を二一世紀の宇宙に架けよう！ 江戸は黄、明治・大正は橙、文化は藍、反天皇制は赤、フェミニズムは紫、周辺は緑、昭和は青……

虹立ちぬ、いざ生きめやも！

ポスト昭和の到来を画する、気鋭の編集・執筆スタッフによる巨大な紙碑。現代のシャープなズーム・アップ。社会評論社二十年にわたる蓄積を世に問う記念出版。

世紀末危機のただなか、二一世紀へと向けて、思想を持たなければ生きられない時代が到来します。私たちの一人ひとりが自らを解放しなければならぬ、生き方を変えなければならぬ。この近過去の日本人自身の結晶を〈生ける糧〉として。

一九八九年十月